

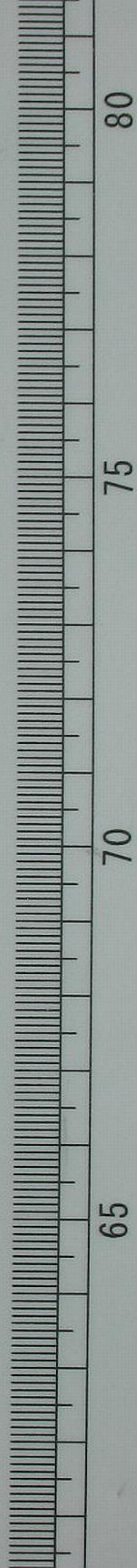


通俗

日本小史

渡邊義方編輯
第十編

上



65

70

75

80

4557
19

赤崎延房檢閲

渡邊文京採觚

梅堂國政畫

通 俗 日本小史

東京書肆 金松堂發兌

通日本小史第拾編之序詞

古を觀て今を鑑と古き依温絲て新しき依
買ふ似たりべく隠れんと顯し奇を行ふハ小説者流の本
事なるがら此書ハ夫と事變り日本政記日本外史國史畧等
の正史と根據とし其他古今の野乘と漁の事實の最も正
確あり茲始飾り掛て飾りあがりて面白く綴りこれハ小學
生徒の童男童女が休業の時間ニ繙き玉る當節流行る
合巻物の果敢なき稗史を見玉ふより少一ハか為まらう
まると手前味噌の塩辛き理屈を併せて序詞ニ代ふ

明治十六年孟春脱稿

編者 渡邊文京記

日本小史 十編上

48-8450

北白中納言顯家



鳥居清長画



後醍醐帝

鳥居清長画



上の巻

新田義貞春宮及び皇子と北
行は始まり尋で金崎城の没落
鯖江の合戦吉野潛幸の事
相模次郎綸旨と賜ふ終る

下の巻

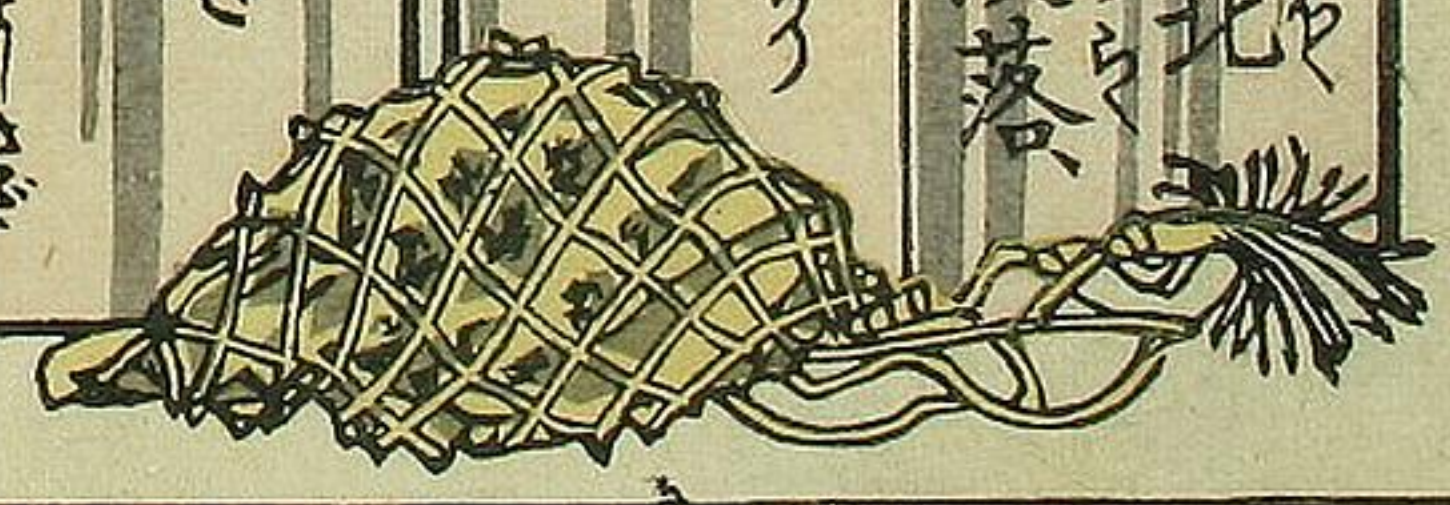
黒地川の合戦ふ始まり次で

の巻

八幡の炎上北畠顯家の討死義貞

巻

最期の事より勾當内侍が事ふ終る



通日本小史第拾編卷之上

東京

深崎延房檢閲
渡邊文京操觚

去程は新田義貞ハ春宮及び皇子尊良を奉じて北行
を宗族従兵皆之に従ぐ獨り大館氏明江田行義宇
都宮公綱本間資氏等乘輿に従ぐハ京師に入る尊氏
帝及び従者と囚へ資氏と殺して兵庫の戦うハ辱
うめりたるの怨と報也義貞ハ七千餘騎を引
率一塩津海津に着きたるハ七里半の山中と越前

の守護足利高経險に據て要撃せんと行方の道と差
塞きたりと聞えしは是より道と換て木目峠と越
りける頃ハ冬の初まは北國の習ふて高き峯々
に雪降て山下の時雨止むるは今年ハ殊に寒気
強く寒風凜烈肌も透り吹雪も甲冑も氷結して進退
去就自由ありむ士卒寒谷の道と失ふハ暮山に宿無
して木の下の岩の陰に縮まり適々火と求め得ざる人
も弓矢を折り焼て薪としも互に抱き合て肌と合
せく身と暖むる果ハ人馬其処此処に凍え死して行

人道を去りしを彼叫喚大叫喚の聲耳に滿て紅蓮大
紅蓮の苦しと眼も遮ぎる河野土居得能ハ三百騎に
て後陣に打らるが天の曲りて前陣に追殿を行へき
道と失るふて塩津の北に滞陣せしと賊軍斯と聞知
りて佐々木の一族一千餘騎前後左右より押寄せん
撃んと競ふと此方もまさ左にさせと防ぎ戦りひ
差違へど道を開き通り技んと憚るりのうら馬も雪
に凍えて働ららむ人も指先凍えて弓と控得む太刀
さへ技おと能むざれば散々よあゆむと撃れよるう恚

行路の難儀に逢ひ千葉貞胤を賊將高経に降参し
 或ひを降り或ひに討まらんとく難儀に及びつ大
 將義貞の絶え敗兵をまとめて敦賀に至り河島維頼
 氣比氏治の應援を得て金崎の城に入らば得たり後
 攻とて義頭へ二千餘騎を従ぐ義助へ千騎を従
 ぐて瓜生が松山の城へと派遣せり然るに賊將高
 経義貞追討の詔旨来りしと詐たり瓜生保と説く保
 欺むるは義貞を叛く保の弟僧義鑑へ誠直の人を
 来り謁して曰く臣が兄愚魯なるがゆゑ多し輕々し

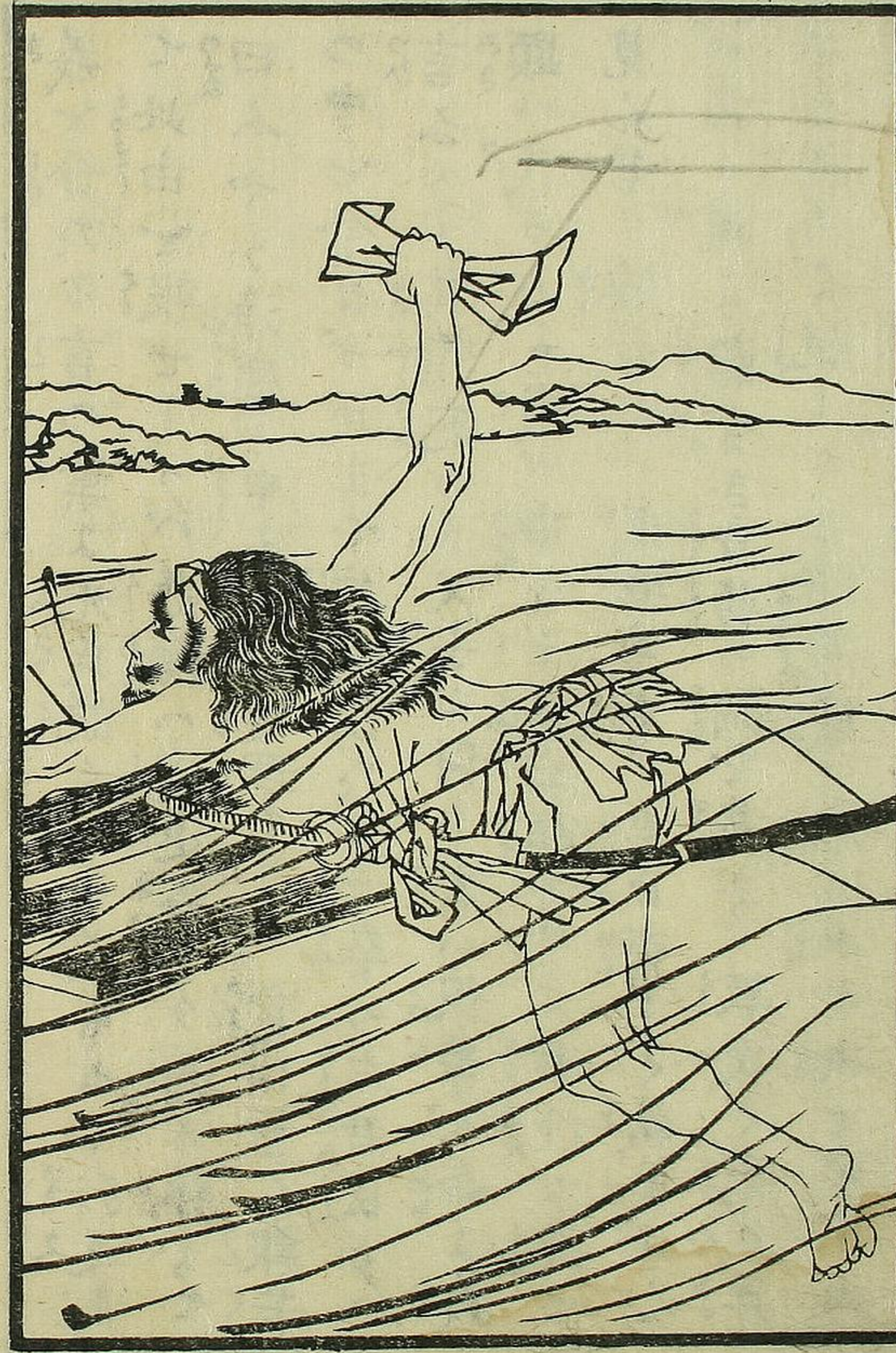
賊の計策を信し官軍を叛きしと云へ終は是非
 と曉りるは復順を帰せんとの臣願をくは一公子と
 擁護し時を待て起らんとま此儀御許容ありたりと
 思ひ入つと述る詞実面を顯たれとま他事もなく
 見えたりは義助其他なきと察し遂はその子式部少
 輔義治を以てあまは詫し自己の兵を引て金崎を歸
 る此時に當りて賊の勢ひは日よ盛んし官軍日々よ
 衰へるを其旗色を見て進退する人の心の定め
 るに義助が軍道より亡失せ残るは僅に二百騎計り

今莊淨慶ある者兵を聚めて道を塞ぐ淨慶の父淨心
も嘗て我が軍に属せし者も義助僅に便りと得し
由良光氏を遣へし順逆の理を説しむ淨慶答へて曰
く臣が去就は父と異なり主義目的の同ドゥらぬ
父子兄弟の間たりとも例少る事ありや去れ
ども我が賊に應ぜしは全らくの本意あり孫と故
く今亦節を變せば表裏常ある武士とや言とん就
へ部下の一名士を賜ひあは其頭を得て戦ひし印と
るし義助の全軍を無事に通らしまわらむを願ふと理

義を分たる言の葉は光氏説くべき道ゆなく引返
て此由を報せしうが義顯へ進退谷まりたる体も
曰ふやう淨慶が申す所も道理ありと覚ゆはと艱苦
の中を今日が日まで付纏ひたる士卒の志君臣とい
言るがう其情宛がう父子も同ド去バ彼等が命も義
顯に代るとも我が命も士卒と換がし我往て説て
見ん若し聴がれば是非もるし君臣齊しく戦死せん
のみし現も難有き良將の詞を其ま取次ぐ光氏再
とび至りて説しうと淨慶遅々して未だ決せざ光氏



綸旨と
 帯びて
 忠景海上
 を渡る



馬より下り立て鎧の上紐切捨つ天下の為に重なる
べき大将の命とて士卒の命は代らんと為た
まふ況んや義より命を輕んぶる士卒の身と
て争ひつ將帥の死を余所見ん去ば早光氏
が首と刎る大将と無事を通しあはせよと言ひ終
らむ腰を刀と閃りと引抜き吐嗟今腹を切らんと
まろ城見て淨慶忽ち感激し急ぎ光氏の死を止め
遂に道を開き一ヶ所義助義頭虎口を遁じ漸く此所
を過るを得たり此間答へ聞居たる士卒の中より金

崎へ通らん玉叶とちや思ひけん二百余騎の兵士
何処ともなく落失て僅十六騎となりふらり而して
敵三万騎を以て金崎の城を圍ミいと聞き諸へ如何
せん越後路へや落べき又玉叶も亦も圍む
突き城に入らんう開き危ふいと異議區々ありける
と栗生顯友一策を出し十六人が鉢巻と上帯とを解
て青竹の末に結付て旗の中より見せけ此所の木
梢彼処の山陰に立置て疑兵と張り夜の明るを待
たりたり金雞三ヶ所を謠ふと雪より白む山の端に横

雲漸やく引渡りたれを十六騎の人々中黒の旗と押
 立て深山寺の樹影より敵陣の替後へ懸出で爪生富
 樫野尻井口豊原平泉寺並み劔白山の衆徒等三万余
 騎應援と一と来りこれ城中の人々心強く覚へ候へ
 ト聲々よ呼つりと動と鯨波をぞ拳たりたる弁が真
 先は進もろ武田與一と京都の合戦も切られとろ
 右の指疵いまと産まして太刀の柄と握るあと出来
 ざれを杉の木とのりく木太刀と作り右の腕もぞ結
 付たり第二番も前とたる粟生左工門頭友へ帯劔の

の太刀を落せし深山柏の周圍一尺計りあるを
 一丈餘も打切て金才棒の如く見せ右の小脇も挟
 をさみにて敵軍の中へ割て入るその勢ひ破竹の如く
 當るべくもあらずざれを金崎城を圍とたる寄手の總
 勢三万余騎素破拙山より後攻の援兵掛りしとろと
 深山寺も立あはる木々の旗の手山風もひらめ
 く影を見るよりも後攻の大軍押よせしとろ油断も
 せそと共りた合ふ周章狼狽一方ありと城中の兵之
 も合せ一時も撃て出たれを寄手の遂も支ふる能は

日本書紀 卷之六

お圍と釋て潰へ去る義助義顯城に入りて義貞と
 合を是よ於て相俱し東宮皇子と船よ奉ト置酒にて
 樂と奏し以て軍旅の鬱情を慰藉を尊氏も高師泰
 等と將とし兵六萬と率めて海陸より來り攻む元來
 金崎の城たる前へ渺々たる海と擁し後多險阻要害
 の計りなく將へ名代の義貞兵へ北国悍慄の暴比
 雄死と以て守るが故落る如く寄手の大軍日ふく擊
 るのみあらずを攻むるぞ見えたり「後醍醐
 帝へ尊氏の重祚の議を容れたまひ曩よ山門より還

幸ありしうども箇々尊氏の詐りありと花山の院
 は押籠りまゐりて不遜の拳動のよなれば宸襟と蕭
 颯たる寂寞のうちに悩まされ霜は響く遠寺の鐘は
 御枕と歌とて楓橋の夜の泊りし御哀と成副られ梢
 は餘る北山の雪は御簾を撥て多深園の昔の御遊は
 御涙を催ふさる紅顔花の如くありし三千の宮女も
 一朝の嵐よ誘われし何處ともなくありしうば夜の
 おとよよ入らせたまひとも夢より外の昔もまじ紫宸
 は星と列ねし百官有司も満天の叢雲は捲ねれて仕

まつる人もあつたれを天下の事如何よりあつぬんと
聞し召さるる便りもまじ鬱々として居さすひい後
式部大輔景繁密に帝に勸めて花山院を逃れ出て吉
野へ落さるるあつたせの衆徒と語らひて再び討賊
の詔旨と天下に布きあらしめし近國の兵あひく
馳集まる是に於て吉野へ行在所と設け勢をひ稍
盛んしうり此事己に一両月及び京都の騒動一方を
らむ王權漸く回復の端緒と爰に開きしうと金崎の
城ハ四方を圍まれ出入の道絶たれを義貞初め城兵

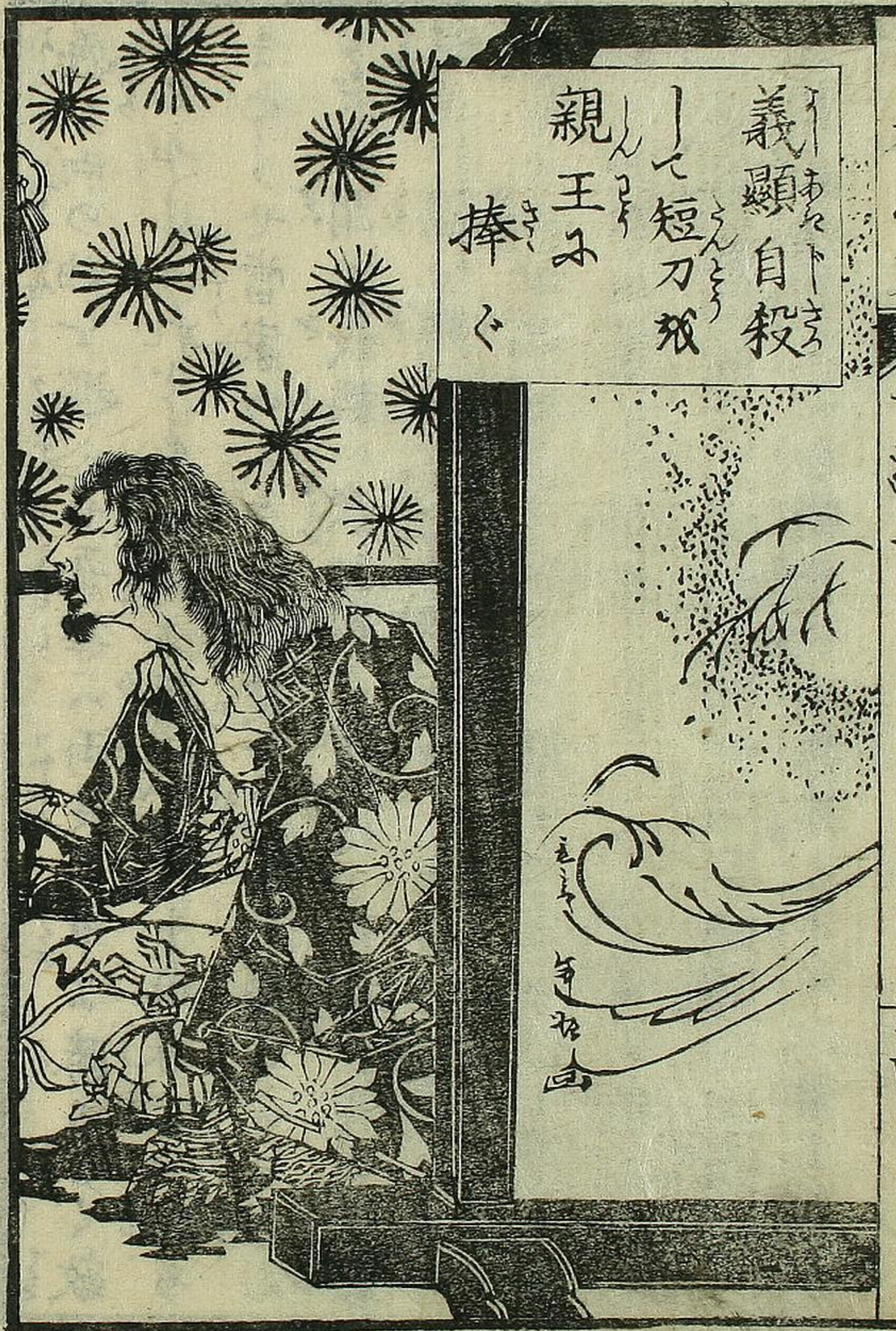
一同曾て知る由ありしうり十一月二日の朝
風は島崎の彼方より金崎をさして海上遙く遊ぎ来
る者あつた城の番兵迅くも見認め海松茂布を被く
海士の浪は漂ふ水鳥々と近付きみ見てあれを
新田が四天王の隨一と呼はるる且忠景ありしれを
人々大いに喜びし様子如何ふと問ふとも待て忠景
やがて髻へ結付来たる綸旨と取出し恭々しく義貞
に捧ぐ開き見れば先帝吉野に逃して行宮を建てる
ひこれに急ぎ京師を攻むべしとの事あり之を見る

よう城兵大の勇を立ち士気忽ち振ふ時、瓜生保
 降りて賊の寄手の中を在り而して其弟重照、義鑑房
 の三人を、松山の城に在りて、曩小義顯より預り、
 義治を押し大將と、義兵を率て官軍に應を保ら、此
 事と聞き將、松山に帰り弟と心を合一、順に帰せん
 と志し、と決め、宇都宮康藤、天野政貞の二人と語り、
 陣營と抜出で帰らんとせし、も賊將高師泰、陣營の四
 方、門と置き、切符と所持せざる者、通行を許さざ
 用心をきく、嚴し、これを保密の一策と案し、師泰の

許し、至りて詐り云る、やう部下の兵百五十人を従
 へ、領地を帰りて兵糧を充つ、菽を取来らん、と
 此美か宥あり、ありと誠し、やうみ請ふ、任せ通行
 の切符と與へ、やう保ら、其切符と三百人と書改、
 泰藤政貞の兵士と俱、故、かく陣門を脱、出で急ぎ
 松山に帰り、義鑑房等と合一、て兵を募る、忽ち
 ありて千餘の兵を得、これを勇と進んで北手の道と
 防ぎ、勢をひ頗ぶる、猖獗あり、斯と聞知ら、賊將師泰、六
 千騎を遣、て保、勢と追撃を、保、悉く、近傍の聚落

と焚拂ひ故意湯尾の驛と取残して敵兵今やと待懸
 一ふ頓て敵の六千餘騎湯尾の驛に入来りて人馬の
 足を休むる所と保泰藤と輕兵と率の夜に乗トて襲
 ひ討ち大いふ敵兵と敗りしが足利高経兵と引て国
 府又歸るより聞えし此圖を脱さば討破と要
 撃して又あまを破る斯りしに近傍に響き物
 應むるが如く争ふて義治の旗下に集りしは勢
 ひ再び振ひしは義治の何とるく憂ひの色面は顔は
 絶て喜べる容子なるよりみぞ羨鑑怪んで問われを

義治両の袖と搔合せ吾等へ兩度の軍は勝て多く敵
 と亡びしれども金崎の籠城すし春宮と始り
 まあつせ當家の人々が苦楚と思へる寢食とも安ん
 ぢごと聞て義鑑の決と流し慰藉して退きたる泰藤
 政貞の牆を隔て之を聞き此人の心腸あり吾等
 争でりかと竭きらんと末頼母しく思ひたり去程
 程は此年の暮として翌年正月十一日雪晴と風止にて
 天氣麗朗はありしに里見伊賀守時成と大將と
 て其勢都合五千餘騎金崎の後詰として八里より余る



義顯自殺
短刀
親王
捧

壬午
年
秋
画

山路と雪路分て進とる師泰も兼て期一たるあ
まれば今川駿河守は二万余騎の兵と授け切所は
て敵を拒グーむ己は其夜も朗々と明る頃双方敦賀
の邊りよ出逢ひ互ひは大切の軍されば此と詮度と
戦ふ光景何時果べうも見えざりーが衆寡終は敵
難く味方負色を顯ひーと大將時成も敵中み取囲ま
と己は危く見えーる義鑑保よ云く曰く我等今此
所は於て討死せざれば味方の勢ハ助くるまどと兩
人已は敵中よ跳り入らんとまーる時源琳助重照の

三弟同トく死せんと勇と立と義鑑ハ声を荒らげて
汝等も若く死する時ハ誰の後ハ残り止まり義治
公と守護まなき心得たりやと云捨て其後敵中ハ突
て入り終る乱軍の中ふ亡びぬ大將討とて残卒争で
全さうるべき吾先よと逃走りて松山の城あを歸り
るに去程よ金崎の城中よ日々賊軍のよめよ宍一
められ今日明日と松山の援兵を待たれども絶
て影ぶみ見えされを終る城中糧米竭て今ハ食ふべ
き物とて無く殆んど飢喝よ迫りーる義貞義助已

其の愛まらる馬と殺し士卒は分ちて食ハしむ左と共
後詰の兵何時来るべくとも覺えざるは阿容々々と
手と束縛く死を待ひ謀畧多たふ似たり如ド此城を
忍び出て一先杣山に入城する味方の兵と駆集めて
前後より攻討王の敵と破るを疑ひるしと將士齊
しく言葉と揃えて義貞義助を勸めしめを兩人尤と
同ト主従絶つみ六七人三月五日真夜中頃密く入城
と抜出て杣山の城を入ふり城兵大つよ喜び斯
る上へ一時も早く賊兵と打破り城中の味方を救ひ

出して先度の恥と雪めん準備等閑あつたりが
木の間に傳ふ春風山路の雪も村消えて往来自由
ふ做りしうへ寄手諸國より馳加つり今へ早十萬よ
餘る大軍とあるは義貞の兵に絶つる五百許の小勢
りて心の矢猛に迅速共施すべきの便術なく只身と
あせり胸と痛めて思ひむ二十日餘りと過る程は金
崎よては最早馬をも食盡し食と断ると十餘日軍勢と
る眼凹骨出て恰も窮鬼に異らむ戦ふべきの擬勢
多たは賊兵早くも探知して四面より一齊に攻り

り墻と乗越え乱入どを城兵支ふべき力なく嵐よ
紅葉の散る如く紛々として斃きたり由良具滋長濱
顕寛此体と見て今ハ是迄ありと思ひ入て義顕見
えて曰く事既よ此よ至る宜しく春宮を小舟召せ
何國の浦へも落し進らせ御自害あつと然るべし臣
等入来る敵と拒いで御最期と心静うみ致させ進ら
せんと云つ五十人の兵と率めて木戸の股も来り
ろろが蹠跟と一さ足の留度も無り一うべ其首は在
合ふ死人の肉と思ひくよ屠り食ひ是と力も戦ふ

ろろ斯て新田義顕ハ皇子尊良の御前へ参りて合
戦も最早是までと覚え候臣等も武士の家も生
ま候へば弓折は矢盡きて命と預まの豫てよりの覚
悟もて候へ君よの臣等と異なり候へば軽々しく御
自害做玉ふあつと勿と聞て莞再と打笑たまふ
否とよ美顕嚮よ主上我とのめて元首の將と做し玉
ひ汝と股肱の臣と一玉ふ豈股肱みくして獨り元首
あるの理ろろんや吾今白刃よ命と縮めて怨と黄泉
の下よ酬ひん自害と開も如何ふ為るのぞと問

日本書紀 卷之...

...

とせ玉へを義頭感涙と止め敢て自害とふ加様と致
まのり候ふと言つ又と逆手も持ち左手の服
も突立ちキリくと引廻し再び刀を抜て宮の御前
に差置つ俯伏する死んでる宮の頓てその
刀を取上げ玉ふ血を塗して御手もども止まらざ
れば御衣の袖めて柄を握り雪より白き御肌と頭
に玉ひ同ト枕も伏し玉ふ痛へりめりたる事共あり
是と見るより御側も侍べりたる藤原行房見時
義武田與一氣比氏治等我後とと思ひくよ腹搔

切て失ふける時延元二年三月二十六日あり氣比
太郎齊晴へ生を得て膂力有り善泳水の術も長トけ
れば春宮と小舟に乗せ奉つり櫓楫もなれば綱を以
て舟と繋ぎ自らよまはれ曳て遊ぶと稍三十餘町漸
やくよみて蕪木の浦も着しる春宮と土人も托し
て松山の城へ入らせ参らせ再び海上と泳ぎて金崎の
城へ帰り氣比氏治が伏し上る立跨がり首を刎
て死したる勇ましりたる最期あり扱も具滋顯
寛の五十餘人を従ぐる門の扉を押し開き師泰の本

陣近く突入り一が身体疲羸甚をぞ一く手も多く
敵討取らる城中も八百の兵あり一が降る者絶
り十二人餘へ皆潔よく討死せり土岐阿波守栗生
左工門矢島七郎の三人へ同トく岩の上ふ立並んで
共切腹せんとせ一処へ船田長門守駆来り新田氏
の運いさごと全く竭む大將兄弟今猶杣山の城に在り
徒らに命を隕さんより暫く身と潛めて後日の謀略
をなさば今日の自殺は勝る万々あるんと言葉と極
め諫められれば三人此に死と止まり四人共遠浅

の波を分て稍半丁許り行らる処は大ひある岩穴の
つり一が爰を究竟の隠所ありとて四人共供に
穴中へ隠れ三日三夜を明一たり却つて説く太子蕪
木の浦に隠れ玉ふより浦人の告るふ依り師秦嶋津
忠治を遣へ一春宮と陣中へ迎へ義貞義助の所在
を問ふ春宮御幼稚に在らせとも有繫賢一き御生
得られば詐りて義貞兄弟ハ己に自殺せしと給む
玉ふ是に於て賊春宮と尊氏に押送一獨り幾頭之首
を傳へて又義貞の事を問はば「単表義貞義助の両

將ハ金崎城没落の後、杣山の城に立籠り、沓り所々
へ使節を遣へ、舊功の輩を集めける。附鱗攀翼の
志しめる者ハ枯木の春に逢し心地して、吾先ふと馳
集より、義心金鉄の兵士共三千餘騎に成より。此事
早くも京師に聞え、これを尊氏足利高経は比陸の兵
六千餘騎を授けて来り、撃しむ高経越前の府に陣し
相持して未だ戦を遂げず。義貞畑時能を遣へ、加賀越前
の境ふる細呂木とりの所は緊しく城郭を構へさせ
大聖寺の城を攻て一挙にあまを抜く。此時まを平泉

寺の僧徒等ハ皆無二の尊氏方にてあり。此時
俄に帰順して三峯の城を構へ、諸國の兵を集めけ
る。追々馳集まる者多く、其勢大いに振ひ、うが近
傍の賊軍等敢て防ぎ戦ふ、いと能く皆府の陣へ落
集まる。斯て三峯の僧徒等ハ杣山へ使者を遣へ、一
人の大将を得ん、おと成望を、これを義貞乃ハち義助
は五百餘騎の兵を添て三峯の陣へ遣へ、うの尾張
守高経は六千餘騎を従ぐ、越前の府に在り、なる
が國中所々を敵に押領せしむ。此終よりして過く、ん

四将岩窟しやうがんくわ
 隠かくきて敵てきの
 鋭と鋒ほうと
 避さく



日本書紀
 卷之十一
 神武天皇
 十三年



神武天皇
 十三年

日本書紀
 卷之十一
 神武天皇
 十三年

ろい遂に兵糧の事と欠んと三千餘騎を府中に残し
 三千餘騎を國中に分ち山々峯々を城を構へさせ且
 暮合戦の隙をりれども戦場雪深うして馬の足立難
 き程を未だ墓々々き勝負を斯て新王の年立
 返り野邊の若草萌出る二月中旬も成りければ義
 助僅りふ百四五十騎の兵を從ぐと籍江の宿へ打
 て出づる高経の副將細川孝基五百餘騎を府の
 城より押寄来り三方より取巻て残さすとの攻め
 たりる義助少しも騒ぐの色なく百餘騎を圓陣に

備へ矢種を惜まざる差詰曳詰散々射させ敵は少
 しも馬の足と立させ七八度が程遭つ啓りし追立
 々々攻付たるは細川が五百餘騎僅りの勢は駈立ら
 と右往左往に乱と立て籍江の宿の後ある川の淺瀬
 を打渡り向ひの岸へ颯と引く義助味方の兵と由の
 川と渡さんと迅る流制し近郷の在家に火と放ちけ
 るし折うる山風荒く吹きさみ暫しの間に焼廣がり
 て炎煙天と焦しを所々在る味方の兵此狼
 煙と望し見て驚破籍江に軍の在と覺えしうりて馳

合せてカと添えよと 杉山より新田義貞千余騎と
 引と打つて出で其他四百騎五百騎づ 馳集まる者
 駿一高経と味方の敗報を聞き三十余騎と引卒と
 國分寺の北まで打出たり 兩陣相距る事凡そ十余町
 中よ一條の川を隔つえより 大河といふ程ふも有絲
 とと折節雪消よ水層増して白浪岸を浸しこれに双
 方霎時白眼合ふく猶豫の体よ見えろる處よ舟田經
 政が郎黨葛何某馬越河岸よ乗出し三尺六寸の大
 太刀と真向よ振翳して瀨枕よ流をこころ 激浪の中

よ水入と乗入と向ひと臨んで渡を容子と味方の三
 千余騎あまを見て争ゆる 霎時も猶豫ふべき一度よ
 颯と打入とて真一文字ふ押渡る寄まる勢も三千余
 騎拒ぐ勢も三千余騎その大將へ何れも名を惜む源
 氏一流の棟梁あり然も平坦の廣原よて進退駈引き
 自在あれを敵味方の六千余騎前後左右よ追つ返し
 つまん字巴よ入乱とて半時許り戦ふより斯てハ勝
 負何時果つべいと見えざる處よ杉山河原より廻
 りろる三峯の勢忽ち敵軍の後ろへ廻りて府中み火

を放ちしるべ賊軍大りの狼狽し府中と指て逃走る
義貞逃るを逐ふて透間もかく攻掛り大りの賊軍と
破りしるべ高経の這々の体もて漸やくは敗兵と集
あ足羽の城は逃籠り急ぎ京師に注進を此事早く
も國中ふ聞えなれを未だ攻めざるは風と臨んで来
り降る者七十三城往昔漢の鄴食其が齊の七十余
城と降りたるより猶勇ましき義貞が勢ひ再び振ひ
つり義貞いまも死せざる由早晩京師へ聞えなれば
尊氏直義大りの怒り是單に春宮の我等と給むた

玉ひ一故油断して斯る大事に及びなれ憎むべきは
春宮ありとて終は鳩毒を以て害し奉る薄情うけ
るまどもあり帝山門より還幸なり官軍金崎に皆
討まぬと披露なりなれば忠義ありなる人々の何れも
眉を蹙め南朝の運數如何なると思ひらる処は先
帝又三種の神器と帯て吉野へ潜幸し玉ひ義貞も數
萬騎を率ゐて越前の国に打出しりと聞えなれば諸
國の官軍も稍回春の思想をみし大館氏明へ伊豫へ
逃ま土居得能等と力と惚せし共は四國を徇へんと

江田行義へ丹波に逃れ高山寺城に立籠り金谷経
氏の播磨に逃れ丹生の山陰に城郭を築き以て山陰
の中道と塞ぐ遠江の井原に妙法院の宮を奉りて奥
の山に砦を構へ宇都宮公綱に紀清兩黨の五百余騎
を率めて吉野の行在所へ馳せ参りこれを帝叡感斜
ありて四位少將と授け玉ふ爰に又亡高時の二男相
摸次郎時行へ先よ六波羅没落の後身を置所るるを
一とく只諸國を流浪して天地を狭く暮し居るるが
此時使を吉野へ遣へり竊らふ奏聞しるるやう臣が

父高時へ僭越無道の行状を以て自ら天誅の殃災を
招ぐ臣争ひて陛下を怨み今尊氏叛旗を翻へり一
朝より平日の皇恩を忘却を其罪天人の共よ容を
ざる処臣もまご坐視するふ忍びを願くは臣が罪を
勅免ありて朝敵追討の綸旨を賜はるべし臣死を以
て陛下の為に賊を破らんと思ひ込んで奏しこれバ
帝其奏を准し玉ひ則ち思免の綸旨を賜ふ

通日本小史第十編卷之上終

臣等
如
八
奏
十
終
上

廿
六

神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...
神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其... 神其...

010190513012

